第8回

たるみず歴史・文化散歩

『垂水城跡』と『殿様水』

垂水城跡

江戸時代18世紀半ば、垂水島津家の家臣・川上親賢が記した『垂城傳誌』に垂水城の記述があります。垂水城は藤原舜清（後の蒲生氏の祖）が築城後、石井、伊地知、川田氏が所有しますが、慶長4（1599）年に垂水島津家2代・以久が垂水に入城しました。

垂水城跡は、シラス台地に築かれた南九州に特徴的な山城で、国道220号線の北迫橋バス停の上にあります。シラス台地の先がつき出た形の見通しの良い場所（野首）を選んで作られ、後方からの敵の攻撃を防ぎ、山城への通路としてシラスを細く切り立てるようにした道（切通し）が作られています。切通しは味方の通路であるだけでなく、敵の侵入を上から攻撃するのにも適した構造でした。

垂水城の切通しは現在、元垂水方面から脇田原の台地への耕作道路になっていますが、頂上には垂水城跡への入口があり、付近には当時の曲輪（郭）の形で畑になって残っています。

垂水城跡の航空写真

山上から南の方角にひろがる錦江湾、市街地や城山団地などを一望にすれば、ここに山城を構えた理由が判ります。垂水城跡は当時の山城の形をよく留めている貴重な史跡といえます。

垂水城跡からの景観

『垂城傳誌』にはまた「慶長16（1611）年以来、麓引移りの後、河崎より北の方を本垂水と云うか」とあるように、垂水島津家4代・久信（相模守）の時、新しい垂水城（別名：林之城）を現在の垂水小学校に平城として移転し、周辺に新しく町割りを作りました。新しい垂水城は明治初年に至るまで行政の中心として重要な役割を果たしました。

現在、「垂水城跡」と「殿様水」は垂水高等学校の「史蹟めぐり」の史跡の一つとなっています。

湧水が流れる殿様水

殿様水

垂水城跡の西側の麓に「殿様水」と呼ばれるきれいな湧水があります。名称のいわれは判りませんが、昔から道行く人々がのどを潤したそうです。『垂水市史上巻』「ふるさとの歴史垂水編」（中島信夫著）によると「垂水城のシラスの崖下からは、清水が湧き出して来るので、この出水にちなんで、垂るる水から「垂水」という地名が起こったといわれるようになった」と記されています。

【参考／垂城傳誌、垂水市史上巻・ふるさとの歴史垂水編】

（文化財保護審議員・瀬角龍平）

防災対策

◎総務課／安心安全係
☎内線 223

垂水市と株式会社南日本放送（MBC）との防災パートナーシップ協定

災害時の情報発信をメディアと連携

◎協定の主な内容

- 市からの緊急時の放送の要請に基づきテレビ・ラジオでの速やかな放送を行う。
- 市の防災情報を「データ放送」で放送するほか、テレビ、ラジオ、HP等での発信に努める。また、市が発信した防災情報をMBCアプリを通じて当該エリアに通知し、地域住民に対して防災情報の伝達を図る。
- 災害の映像や写真、画像等の可能な範囲での相互提供を行う。
- 垂水市内において、小中高校生や住民を対象にした防災学習会等時に、講師派遣や災害映像の提供を行う。

11月26日、株式会社南日本放送（MBC）と垂水市との間で締結する「防災パートナーシップに関する協定」の締結式が市役所で行われました。

これは、同社と垂水市が連携して自然災害の被害を軽減させるための防災情報の発信や防災活動に取り組むことにより、住民の安全の確保を目的としたものです。

この協定の締結により、垂水市からの緊急時の放送の要請にMBCのテレビ・ラジオでの速やかな情報発信やMBCアプリでの情報発信、また災害時の映像や写真、画像等の相互提供、市内小中高校生や住民を対象にした防災学習会等への講師の派遣などが行われます。

協定式では、協定の内容が確認され、同社・有山貴史取締役と尾脇市長により協定書への署名が行われました。

今回の協定によって、より一層の防災対策が図られます。